ルポライター
滝川 康治

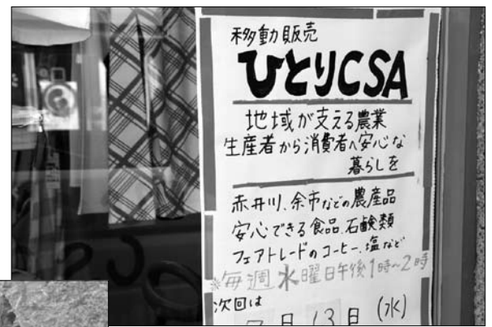
〝農と食〟北の大地から

連載第150回

生産者と消費者の〝地域の橋渡し役〟として奔走

赤井川発「ひとりＣＳＡ」の営み

後志管内赤井川村の主婦・ミリケン恵子さんは、地元で生産された新鮮野菜や卵などを集めて移動販売したり、小樽市内の妙見市場に店を出して、地域のなかで農産物とお金が循環する仕組みを創ろうと東奔西走する。名づけて「ひとりＣＳＡ」、始めてから4年目になる。高齢の農家や年金生活者、商店街の人たち、小規模な食品事業者らとの橋渡し役を担い、新しいつながりも生まれてきた。移動販売の合間にパン屋や惣菜店で商品を仕入れ、地元の人たちに販売するかたわら、ミニコミ紙を発行して映画会や講演会を開いたりして社会のありかたも問いかける。「ひとりＣＳＡ」に同行してミリケンさんの取り組みを追い、協力してきた人たちの話に耳を傾けてみた。



▲店先を提供するジーンズショップでは、ＣＳＡの告知文を掲示して協力

◀独り暮らしの顧客が多いため、とれたて野菜はバラ売りが基本。卵は１個から販売する

商業都市・小樽で移動販売
農産物とお金の循環めざす

シャッターが閉まったままの店舗が目立つ、小樽市稲穂地区の商店街。水曜日の昼下がり、赤井川村などで生産された〝庭先野菜〟を積んだ車がジーンズショップの店先に停まった。同村の主婦、ミリケン恵子さん（１９７０年、東京都生まれ）が３年前から続けてきた「ひとりＣＳＡ」が始まるのである。

常連客が次々にやってきた。

「この短いキュウリはどうやって食べるの？」

「ピクルスにするとおいしいよ」

ミリケンさんとの会話に花が咲き、情報交換の場にもなっている。

何人かの買い物客に話を聞くと、こんな答えが返った。

「昔はこうやって暮らしていたんだよね。（移動販売を）楽しみに集まっているような気がします」

「話すことで、ミリケンさんの人柄が分かりますね」

「いつも新鮮な野菜が食べられるので楽しみです」

５月から11月にかけて、農家から20～30種類の野菜や卵などを集め、週２回、小樽市内の５カ所ほどをまわり移動販売する。生産者は赤井川と余市の12軒。とれたて野菜の多くは、余計な包装をせずに手渡す。

「小樽には独り暮らしの人が多いので、バラ売りが基本。卵も１個売りから応じています。（新聞紙で作った）袋は、つながりのある余市の障害者作業所が作ったもの。そうした関係を広げていかないと、世の中は良くならないんじゃないかな」

５月から11月まで週２回、小樽市内の５カ所ほどで行なわれる「ひとりＣＳＡ」の移動販売。赤井川村や余市町の12軒の農家と提携し、新鮮な野菜や平飼いの卵、フェアトレード商品などを提供する。主宰者のミリケン恵子さんの到着を待っていた、常連客らが買い求めていく（７月13日、小樽市稲穂地区で）

「わたしが女性だからこそ近づいてきて、話をしてくれる。それを生かしてやれるのがＣＳＡです。だから、『お互いさま』という気持ちが自然に生まれますね。そうした思いを、次に伝えていきたい」

と、主宰者のミリケンさんは手応えを感じている。

販売の合間に馴染みのパン屋や惣菜店に寄って品物を購入。地元に戻り、それを購入価格で売る。利益は求めず、農村と商業都市の主婦や年金生活者、小規模商業者、農家との〝橋渡し役〟をしている。

今年から、毎週金曜日の日中、市内花園にある妙見市場で地域の農産物や加工品、フェアトレード商品、生活雑貨などを集めて販売する「ひとりＣＳＡ妙見ショップ」も始めた。こちらは、冬場も実施している。

生産と消費の現場が直接つながることで、地域の生産物とお金が循環する仕組みづくりをめざす。

地域間で相互の購買活動へ
自己流のＣＳＡを追求する

ミリケンさんは２００６年、英語教師をしているアメリカ人の夫や４人の子どもたちとともに、赤井川村に移り住んだ。以前は、東京の福祉施設で自閉症の子の言語指導に携わったが、結婚を機に仕事をやめ、首都圏や米国を転々。広いところで子育てがしたくて、福島県内で土地を探したこともある。

広大な北海道に魅せられ、赤井川に落ち着く。自分たちで家を建て、「マーヴェリンガーデン」と名づけた畑で自給自足をめざし、今では５頭の山羊と鶏も飼う。

念願の田舎暮らしが実現し、子どもたちも大きくなった。子どもを介して地域活動には参加していたが、「３・11」以降は社会的な活動に目が向いていく。脱原発の署名を集めて道庁に提出したり、ＴＰＰ（環太平洋経済連携協定）などの問題にも関心を広げてきた。

ミリケンさんは４年前、ミニコミ紙『おむすび』の発行を始め、今年６月で50号に達した。Ａ４判12ページ前後、１～２カ月ごとに発行しており、中身は「ひとりＣＳＡ」の案内をはじめ、環境や憲法、格差、食糧、人権の問題…と幅広い。

ＣＳＡは、Community Supported Agriculture の略で、「地域で支え合う農業」と訳される。

軽ワゴン車に野菜などを積んで赤井川と小樽を行き来する

同じ地域に住む農家と消費者が提携し、農畜産物を直接受け渡しするシステムのこと。かかりつけの医者がいるように、ＣＳＡの会員に懇意にする農家がいるようなイメージだ。元は日本の産直連携をモデルにしており、現在、米国やカナダでは、千を超えるＣＳＡがあるという。北海道では「メノビレッジ長沼」の取り組みが知られており、この連載でも何度か紹介したことがある。

ミリケンさんは、ＣＳＡを「地域が作った農産品を近隣地域に運び、消費してもらう」取り組みと位置づけ、地域間での相互の購買活動という意味に置き換えてみた。

人口１１００余りの赤井川で生産された野菜を隣の商業地・小樽で移動販売し、そこで作られたパンや惣菜など地場の製造品を地元に戻って販売する形で、お互いに必要な物販活動にしている。傍目には〝行商のおばさん〟のようにも見える移動販売だが、なかなか奥は深い。

消費者や生産農家には好評 継続することで信頼を得る

農産物を提供してくれる農家には、２割程度の経費を差し引いて売り上げ代金を手渡す。「どんぶり勘定だけれど、農家が不満を感じないような値段にしています」。無農薬野菜だけを集めて販売するようなやり方はしない。もちろん、有機農産物はきちんと説明して売る。

「消費者が『無農薬でなければ…』と騒ぐことには疑問を感じる。（農薬を使わざるをえない）農村にいかに人手が足りないのか、その現実をよく見てもらいたいと思います。わたしは、生産者と消費者の橋渡し役をしていきたい」

という姿勢で臨んでいる。

「新鮮な野菜が食べられるし、ＴＰＰの話もできて面白い」と平山三起子さん

野菜などの生産農家に入る日銭は数千円ほど。「売ってもらえてありがたい」という人もいれば、「おかず代かな」と捉える人もおり、受け止め方はさまざまらしい。

「始めたころに比べると、続けてきたことで信用につながっている、と感じますね。『お遊びでやっている』と思う人もいるでしょうが、新聞で紹介されたりして、中身を理解してもらえるようになってきたんじゃないかな」（ミリケンさん）

「ひとりＣＳＡ」のために毎週水曜日になると無償で店先を提供している、ジーンズショップＬＯＫＫＩ代表の平山三起子さんは、ここでテント製造業を営んでいた父親の姿を見て育った。ミリケンさんとは４年ほど前に知り合い、今では気心が分かり合える間柄になった。

「『ひとりＣＳＡ』があることで、近所の人が出てきて世間話もできる。新鮮な野菜が食べられるし、店の宣伝にもなります。ＴＰＰのことまで話題になって、面白いですよ」

と、笑顔で話す。

赤井川村の農家・川崎喜代美さん（１９３８年、同村生まれ）は、３ヘクタールほどの畑とハウスで、野菜などを一人で作る。農業歴は50年余り。70代後半の今も現役で、メロンやスイカの栽培が得意という。生産物は、直売や地方発送、地元農協のギフト商品として出荷し、近所に住むミリケンさんにも託す。

「どんな野菜でも持って行ってくれるので、本当に助かっています。買ってもらえないと、（生産物を）捨てなければならないものね。ミリケンさんは人あたりがいいから、売るのが上手で、きれいに捌いてくれます。ありがたいですよ」

と、川崎さんの信望は厚い。地元の年配農家の人たちが、この活動を支えている。

農業歴 50 年余りの川崎喜代美さん（左）と「ひとりＣＳＡ」を主催するミリケン恵子さん

“農と食”
北の大地から

学びの場や映画会も開き 庶民同士の〝橋渡し役〟に

取り組みは「ひとりＣＳＡ」にとどまらない。

小樽の妙見市場はかつて、小さな店がひしめき、多くの市民が買い物に訪れる場所だった。今は、５軒ほどに減ってしまい、寂しい。そんな市場の一角に「ひとりＣＳＡ」の拠点があり、定期的に「妙見ゼミナール」という学びの場を設けた。

「市場という庶民の生活の真ん中に、『学ぶ』という機能を加え、誰もが、気軽に、必要なことを知る機会を増やす」のが目的で、毎回、講師を招いて勉強会を開く。テーマは、ＴＰＰや遺伝子組み換え、環境、戦争と平和など幅広い。集めた一人５百円の参加費を市場内で買い物ができる地域貨幣「結いマネー」に替え、謝礼として講師に渡す。ユニークな方法で「学びの場」を提供する。

赤井川や余市、小樽の旅館や飲食店などを会場に、ドキュメンタリー映画の上映会も開催する。小樽市住吉地区の玩具・絵本店＆カフェ「キンダーリーフ」に依頼し、本屋のなくなった地域に絵本を届ける「えほん定期便」の活動も続けてきた。

そんなパワフルなミリケンさんは今年から、赤井川での「援農」希望者を募っている。

地元の赤井川では、〝出面さん〟と呼ばれる、日雇いで農作業を手伝ってくれる人（女性が多い）を探している。農家の高齢化などで人手が少なくなってきたためだ。

そこで、農作業を覚えながら、土に触れ、自然の営みを体験してみようとする人を募り、雇用先の農家とつなぐことにした。賃金は各農家から支払われる。

作業をしたい人と地域の農家が、生産を通じて結びつくことが目的。ミリケンさんは、ここでも橋渡し役を果たそうとする。お互いのニーズがうまく合わず、なかなか進まないが手応えはあるという。

最近「もんぺ」が縫える人を募集している。動きやすく、アジア人の体型にも合う作業着だが、作る人はなかなかいない。

「お母さんが家で働く姿を見ると、子どもたちにも安心感があるんじゃないかな。内職して仕事を増やすことができれば、年金生活者や母親が外で働かなくても済みます」

考えたことを実践に移す、すこぶる行動的な人だと感心する。

その活動は広がりを見せる。同じ思いをいだく人たちがつながり、生産者と消費者との壁を取り払い、地域や社会の課題を克服しようと模索する毎日が続く。

４年目を迎えた「ひとりＣＳＡ」を今後、どう充実させていくのか――ミリケンさんに聞いてみた。

「（移動販売を）大きくすることは考えていません。物のやり取りだけなら直売所をやるほうがいい。わたしは（農家やお客さんとの）おしゃべりが好きだし、話すことで世の中の不安が消えていくような気がします。『行商』と言われてもいい、今のようなやり方のほうが、お年寄りが来てくれるんですよ」

一人の移住者が始めた活動が地域に新風を吹きこんでいる。

■連絡先＝余市郡赤井川村赤井川４８２―１
☎０８０・６０８５・９０６３
Email：yomo_an@yahoo.co.jp

移動販売の合間に小樽で仕入れたパンを、赤井川の子どもたちが楽しみにしている

※筆者のＨＰ「滝川康治の見聞録」takikawa.essay.jp/ に本シリーズの過去記事を収録しています。ご参照ください。